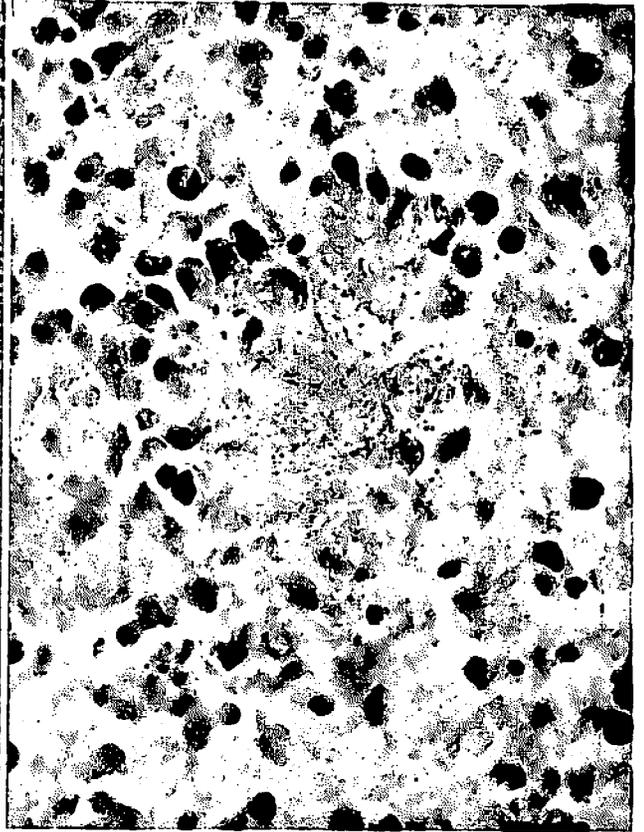
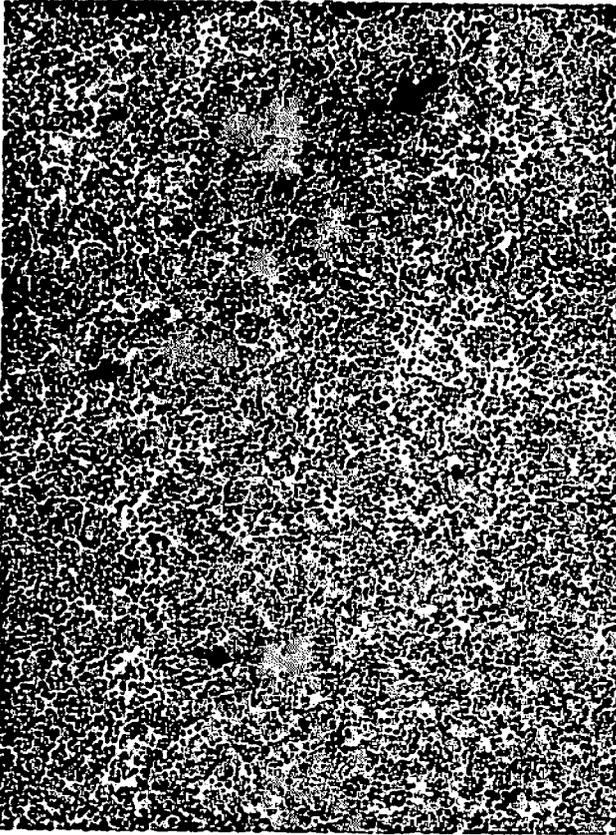


ロゼットのある肺膿瘍 (Nocardiose)

第9回獣医病理学研修会標本No.127

北大比較病理学教室



動物は1年4ヶ月齢の牝牛。肺炎症状を呈し、経過約40日で殺処分されたもの。サルファ剤、抗生剤などの投与によっても症状の好転を見なかったもの。

肉眼所見 (現地獣医師による)

肺：両肺全般に亘り膿瘍密発、右側にて顕著 (2.0×3.0cm程度の膿瘍) 右肺尖部充血。肺門リンパ節5.0×2.0×3.0cm)の前後のもの7個。肝：左葉内臓面中央部附近に2.5×2.5×2.0cm及び1.0×1.2×1.0cmの膿瘍各1個。腎：両側性に皮質全般に亘り、点状出血。

組織学的所見

1)肺の密発膿瘍：被囊膿瘍である。膿瘍は主として好中球 (変性)、壊死肺組織塊からなる。膿瘍内に大小のロゼットが観察される (Fig. 1; H-E, ×119)。ロゼットの内部は弱好酸性に染まり、均質ならず、辺縁部には変性好中球が放射状に密列している。Carbol-thionine 菌染色でロゼット内部及びロゼット外に繊糸状の細菌が屢々染め出される。この細菌は時折グラム陽性を示す (グラム陰性には決して着染しない)。又この菌は時折PAS陽性に着染 (Fig. 2; PAS, ×750)。チール・ネールゼン染色では陽性細菌は染め出されない。膿瘍周囲の被囊は概ね次のような層構成を示す。膿瘍塊に接する最内層は敷石

状に密列する類上皮細胞 (大喰細胞) からなり、類上皮細胞は時折多核巨細胞化を示す。その周りは纖維芽細胞に富む纖維層である。この層には形質細胞の浸潤が強い。最外層は纖維細胞からなる少々緻密な纖維層である。

2)被囊膿瘍以外の肺組織：(a)小葉間結合織は纖維性に増幅、閉管性水腫。細気管支拡張気味で、粘膜下平滑筋細胞水腫性を示す。被囊膿瘍近辺の細気管支化膿性カタル性を示し、動脈は内膜の肥厚を表わす。(b)他の標本で、比較的大きなNekrobazilloseの病巣が見られた。主としてその壊死巣辺縁に多数のNekrobazillenが観察された。この菌はCarbol-thionineで染出され、且つグラム陰性に染まる。繊糸状である。PAS及びチール・ネールゼンに不染である。かゝる病巣は好中球の反応を伴っていた。被囊はされていなかった。

3)肝の膿瘍も1)の如き被囊膿瘍であった。但し細菌は染め出し得なかった。又明らかなロゼットも見出されなかった。

組織学的診断

ロゼットのある肺膿瘍 (Nocardiose) (他の肺切片にNekrobazillose病巣あり)、Nocardiose病巣としたものを或はNekrobazillose病巣と見る向きもあるかも知れない。